

國學院大學学術情報リポジトリ

プロジェクト活動紹介

デジタル・ミュージアムの構築と展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 加藤, 里美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001758

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(A)

プロジェクト責任者 井上 順 孝

1. プロジェクトの概要

このプロジェクトは、平成19(2007)年度から3年計画で開始されたものであるが、大きく2つの課題を有する。1つは研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化の統合的推進である。この目的のために機構の各機関のスタッフを横断するような企画委員会、及びワーキング・グループを編成している。もう一つは本プロジェクト独自のコンテンツの構築と研究の推進である。E O Sの展開、双方向の論文翻訳、教派神道関係の基礎データのオンライン公開などである。いずれも平成14年度から18年度にわたった21世紀COEプログラムの後継事業としての性格を担っている。以下、この大きく2点について昨年度の成果と今年度の計画について概要を述べる。

なお、本年度のスタッフは次のとおりである。

責任者 井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二(専任教員)

石井研士、黒崎浩行、ノルマン・ヘイヴンズ(兼担教員)

市川収(客員研究員)

市田雅崇、大澤広嗣(PD研究員)

李和珍、ラウラ・ココラ、ジェシー・ラフィーバ(研究補助員)

ナカイ・ケイト、関守ゲイノー(客員教授)

アンネマリー・アイフラ、エリック・シッケタンツ、江島尚俊、武井順介、高橋典史、

ドロシア・フィルス、松本喜以子、山田美

紀子(共同研究員)

2. 昨年度の成果

① 機構全体に関わる成果

研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化の統合的推進に関しては、昨年度、次のような成果があった。計画を円滑に実施するため企画委員会を設置し、相互の事業の目指すところについての理解を深めた。もっとも大きな課題は、平成20年度に導入予定の新しいソフトウェアに関する検討であったので、技術的な問題を中心的に議論するために、ワーキング・グループを発足させて細かな点を検討した。

なお、企画委員会のメンバーは次のとおりであった。井上順孝(責任者)、石井研士、市川収、内川隆志、遠藤潤、大澤広嗣、小川直之、加瀬直弥、加藤里美、黒崎浩行、千々和到、平藤喜久子、藤田大誠、N・ヘイヴンズ、星野光樹、星野靖二、堀越祐一、松本久史(以上教員)、安達匠、及川聡、後藤幸雄、古山悟由、斉藤崇樹、堀内弘行(以上職員)

機構には、各プロジェクト独自のコンテンツがすでに存在していた。本プロジェクトではE O Sと神道関係の論文の双方向の翻訳がアップロードされており、学術フロンティアの成果としては、「大場磐雄博士写真資料」「柴田常恵写真資料」「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」「宮地直一博士写真資料」「杉山林継博士収蔵資料」「(考古学資料館所蔵縄文土器)」が公開されていた。またCOEプログラムでの成果をもとに「神社資料データベース」、「国学関連人物データベース」が構築され、拡充

がはかられていた。

これらを統一的なソフトで公開するとともに、國學院大學図書館のデジタル・ライブラリーの事業も連携させていくことを目的として数度にわたる企画委員会及びワーキング・グループの会合を開催した。すでに公開されているコンテンツは、独自のデータベースソフトが用いられているが、これを統一することでさまざまなメリットが生じる。ソフトの選択と基本的構想については、繰り返し議論がなされた。AMC(学術メディアセンター)に設置される学術資料館の収蔵物及び展示物に関するデータベースの構築、ORC(オープン・リサーチ・センター、平成19年度採択)の事業によって構築されるデジタルデータ、また本学教員が科学研究費補助金等外部資金を得て作成したデータベースの公開にも、このソフトが利用できるようにとの配慮もあったので、その調整には関係者の意見を細かく聴取した。とりわけ検索システム、及びローマ字入力方式については多くの時間を費やした。

②プロジェクト独自の成果

独自のコンテンツ作成と研究に関しては、EOSの拡充、双方向翻訳の推進、教派神道等の基礎資料のデジタル化がなされた。EOSの拡充に関しては、新たな事項の追加、グロッサリーの作成、各項目にリンクされた画像・映像の大幅な追加を行なった。このなかには、平成18年度に本学の大学院でCOE関連の講義を受講した院生によって作成された事項や画像、映像が含まれている。グロッサリーは日本語から及び英語の双方から調べられるようにした。とくに神社については別途一覧表を作成し、資料編に登場する神社名も含めてリストアップした。(図1参照)

また神道についての専門的な知識を得ていない外国人の学生その他を念頭においた画像を中心とした用語解説(Images of Shinto: A

Beginner's Pictorial Guide)の作成も開始された。最初に手がけられたのは、神社の境内図で、ここに鳥居、境内、社殿、手水舎、絵馬、社務所、などの絵が描かれており、それをどう呼ぶか分からない人でもEOSの解説へとリンクできるようにしてある。(図2参照)

双方向の論文翻訳、すなわち神道関係の論文を、日本語から外国語へ、また外国語から日本語へと翻訳する事業が平成18年度から始められたが、19年度は次の4点が翻訳された。日本語から英語へ2点、日本語から英語へ2点である。

日本語から英語へ翻訳された論文は、岡田莊司「天皇と神々の循環型祭祀体系—古代の崇神—」(英訳 The Circular System of Rites Linking the Emperor and the Kami—Menacing Apparitions of the Kami in Antiquity)と、中西裕二「“ネイティブの人類学”のもう一つの可能性—黒田俊雄と神仏習合の人類学的理解から」(英訳 Another Possibility of “Native Anthropology”: The Anthropological Understanding of Kuroda Toshio and Shinbutsu Shugo)である。

英語から日本語へ翻訳されたのは、John Breen, “Pacific trauma: Yasukuni and the fetishised narrative of war”(邦訳「靖国神社による戦争語りのフェティシズム」)と、Sarah Thal, “Shinto: Beyond Japan's Indigenous Religion”(邦訳「神道—日本の固有宗教をこえて」)である。

なお、EOSの総論部分は英語以外にも、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語に翻訳されている。双方向の翻訳も日英間には限られておらず、一昨年に日本語から韓国語への翻訳が一点なされている(井上順孝「神道大教にみられる『神道』の教団化過程」)。欧米の言語のみならず、アジアの言語、とくに中国語と韓国語との双方向での翻訳を視野に入れている。

教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料

図 1 グロッサリ（神社一覧：抜粋）

あ行				
あがたじんじゃ	県神社	Agata Jinja		E2
あきはさんほんぐうあきはじんじゃ	秋葉山本宮秋葉神社	Akihasan Hongū Akiha Jinja		E2
あきはじんじゃ	秋葉神社	Akiha Jinja		E2
あざかじんじゃ	阿邪加神社	Azaka Jinja		E2
あさまじんじゃ	浅間神社	Asama Jinja		E2
あすかにいますじんじゃ	飛鳥坐神社	Asukani'imasu Jinja		E2
あすすきじんじゃ	阿須須岐神社	Asusuki Jinja		E2
あそじんじゃ	阿蘇神社	Aso Jinja		E2
あたごじんじゃ	愛宕神社	Atago Jinja		E2
あつたじんぐう	熱田神宮	Atsuta Jingū		E2
あなしじんじゃ	穴師神社	Anashi Jinja		E2
あなしにますひょうずじんじゃ	穴師坐兵主神社	Anashinimasuhyouzu Jinja		E2
あぶらびじんじゃ	油日神社	Aburabi Jinja		E2
あふりじんじゃ	阿夫利神社	Afuri Jinja		E2
あまてるじんじゃ	阿麻氏留神社	Amateru Jinja		E2
あめのいわとじんじゃ	天石門神社	Amenoiwato Jinja		E2
あやべはちまんじんじゃ	綾部八幡神社	Ayabe Hachiman Jinja		E2
あわじんじゃ	安房神社	Awa Jinja		E2
あんとうじんじゃ	安東神社	Antō Jinja		E2
A				
Aburabi Jinja	油日神社	あぶらびじんじゃ		E2
Afuri Jinja	阿夫利神社	あふりじんじゃ		E2
Agata Jinja	県神社	あがたじんじゃ		E2
Akiha Jinja	秋葉神社	あきはじんじゃ		E2
Akihasan Hongū Akiha Jinja	秋葉山本宮秋葉神社	あきはさんほんぐうあきはじんじゃ		E2
Amateru Jinja	阿麻氏留神社	あまてるじんじゃ		E2
Amenoiwato Jinja	天石門神社	あめのいわとじんじゃ		E2
Anashi Jinja	穴師神社	あなしじんじゃ		E2
Anashinimasuhyouzu Jinja	穴師坐兵主神社	あなしにますひょうずじんじゃ		E2
Antō Jinja	安東神社	あんとうじんじゃ		E2
Asama Jinja	浅間神社	あさまじんじゃ		E2
Aso Jinja	阿蘇神社	あそじんじゃ		E2
Asukani'imasu Jinja	飛鳥坐神社	あすかにいますじんじゃ		E2
Asusuki Jinja	阿須須岐神社	あすすきじんじゃ		E2
Atago Jinja	愛宕神社	あたごじんじゃ		E2
Atsuta Jingū	熱田神宮	あつたじんぐう		E2
Awa Jinja	安房神社	あわじんじゃ		E2
Ayabe Hachiman Jinja	綾部八幡神社	あやべはちまんじんじゃ		E2
Azaka Jinja	阿邪加神社	あざかじんじゃ		E2

のデジタル化は、神理教、神道修成派、黒住教について進め、おおよそ完了した。T I F ファイルとしてデジタル化し、その目録もデータベース化した。

3. 今年度の研究計画等

今年度の計画も機構全体に関わる部分と、本プロジェクト独自の部分とがある。機構の

デジタル・ミュージアム構想の推進については、統一的なソフトの導入が決定された。富士通が開発したミュージアム構想が採用となったので、この基本仕様の説明を受けたのち、それぞれのデータベース、その他がどのように設計しなおされなくてはならないかを議論していく。前年同様に技術的な問題はワーキング・グループによって検討し、富士通の担

図2 境内図



当者とも相談の上で基本設計を行う。新しいソフトを用いてのデジタル・ミュージアム関係のホームページの更新は本年度中に終了する予定で計画を立てている。これによって、EOS、学術フロンティアにより構築されたデータベース、神社データベース、国学者データベースなどが、統一的な仕様により公開されることになるので、より多くの人にアクセスされると予測している。

独自のコンテンツ構築は、EOSの拡充、双方向翻訳の継続、教派神道・神道系新宗教関係の基礎資料のデータベース化とそのオンライン公開を柱とする。神道についての知識が比較的乏しい人を対象とする画像による用語説明は、境内図に続いて、社務所図、人生儀礼・年中行事図などを作成し、解説する用語を増やしていく。

教派神道・神道系新宗教の基礎資料については、黒住教、神理教及び神道修成派のデジタル化された基礎資料(マイクロフィルム及

びコピーとして収集したもの)の一部を教団本部と協議の上、オンラインで公開する予定である。昨年度末には、井上順孝が熊本県玉名郡長洲町に本部のある神道系新宗教の祖神道での教団資料調査を実施したが、その折に、教祖松下松蔵に関する資料(主として書簡類)の分析について了解が得られた。これらをデジタル化するとともに、記述内容の一部をデータベース化し、分析も行なう。この資料は教祖の生存中の宗教活動の内容を詳しく知る重要な手がかりとなるもので、この分析により祖神道の展開過程についての新たな研究成果が期待される。

また、21世紀COEプログラムで確立された国際的な研究交流を継続・発展させるために、10月26日(日)に国際フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ」を開催する。フォーラムは二部構成となっており、午前中は若手研究者を中心にしながら、現状認識や

今後の課題について自由に討議するという形式をとる。また、午後にはヨーロッパから外国人研究者3人を招聘し、発題とコメント、そしてフロアを交えての討議という形式をとる。

このテーマは、情報化がますます進行していくという研究・教育環境の中で、どのように神道・日本宗教についての情報を交換したらいいのか、また適切な宗教文化教育はどのようにして構築されるかなどについて議論することを目指している。

11月に実施される「日本文化を知る講座」は、今年度は本プロジェクトが中心となって企画することとなった。立教大学の月本昭男教授、東京外国語大学の丹羽泉教授、また本

学の青木周平教授、平藤喜久子講師が講師予定者である。4週連続で行なわれるが、テーマは「現代人にとっての神々の物語—教材としての神話—」である。

なお、今年度の研究実施に当たっては、科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者・大正大学教授星野英紀)の採択に伴い、この研究実施との連携を重視することとなった。この科研費による研究の研究分担者として、本プロジェクトメンバーの井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子の3名が加わっており、この研究の推進に当たって重要な役割を担っていることによる。

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(B)

加藤里美

・事業概要

[担当責任者] 小川直之

[分担者(*印共同研究員)] 小川直之・黒崎浩行・山内利秋*

文部省(当時)私立大学学術研究高度化推進事業(「学術フロンティア推進事業」)の拠点指定を受け、平成11年度より進めてきた「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクトは、本学で所蔵する多くの画像資料とその関連資料について、原画像資料の保全とデジタル化による再生活用に向けた取り組みを行い、劣化画像資料の保存・再生に関する方法論を確立するとともに、これまで研究資料として用いることが難しかったこれらを利用した研究を進めるなど、大きな成果を挙げてきた。デジタル化作業を続けてきた画像資料は、目録等を刊行するとともに「國學院大學学術資料データベース」として公開することによって学外からの検索も可能となり、研究者への提供はもちろんのこと、学校教育や教育委員会等の活動を通じて社会全体への還元も行うことができた。16年度以降は図書館・神道資料館・考古学資料館との共同研究体制のもとで、学内における学術資料の再生活用とその方法の構築について相互の連携を図りながら研究を進め、人文科学資料のアーカイブス構築に向けた研究を展開した。

上記の成果にもとづいて、平成19年度も本学所蔵の画像資料を核とする人文科学資料アーカイブスの構築に向けて継続して研究を進めるとともに、さらにこれらを活用した研究活動の一層の充実を図ることで、近代学術資産としての再構築を目指した。具体的には、保存のための措置を完了した宮地直一・柴田常恵(含、田沢金吾)旧蔵のガラス乾板について画像をデジタル化するとともに、乾板が有する画像以外の情報、あるいは周辺情報を加えて目録化・データベース化を行った。加えて、宮地直一旧蔵の神社関連絵葉書についてデジタル化に向けての準備を進めた。年度末には、「画像資料研究フォーラム『人文科学と画像資料研究』X I—画像資料の公開と知的財産権—」を開催し、デジタル・ミュージアムの構築に向けて、学術資料アーカイブスにおける知的財産権の問題についての議論を深めた。また、これまでの研究の一部をまとめた『写真資料デジタル化の手引き—保存と研究活用のために—』、『人文科学と画像資料研究』第5集を刊行し、成果の公開を行った。